人口減少を前提とした
新しい地域コミュニティの形とその支援策

政策企画部　企画参事付

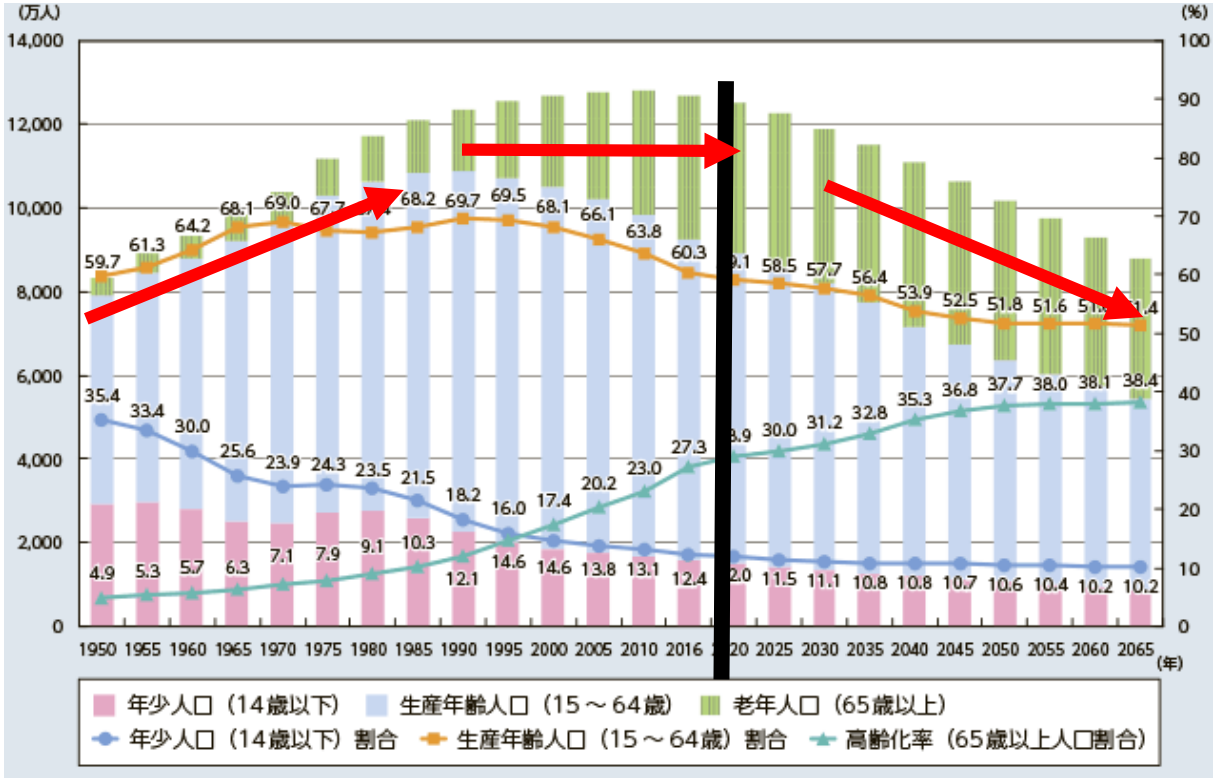
農林水産部　農村振興課

同　経営支援・担い手育成課

（外部メンバー）
京都大学大学院農学研究科
NPO法人ムラツムギ

人口は、これから急減する

○日本の将来人口推計



資料：平成29年版厚生労働白書

○府内の将来人口推計（千人）

地域	2015年①	2040年②	②／①
山　城	555	456	82%
京都・乙訓	1,624	1,473	91%
南　丹	137	98	72%
中　丹	197	150	76%
丹　後	97	61	63%
計	2,610	2,238	86%

資料：京都府人口ビジョン（平成27年公表）

過去30年間横ばい

↓

2040年/2015年比
丹後で37%減
南丹で28%減

地域コミュニティ衰退の背景

経済社会の発達

生活を支える基盤が

「助け合い」から「ビジネス」に変化

共同体意識の希薄化

主に都市部

→ 住民の孤立化

人口減による担い手の減少

農村部で先行

地域社会の継続性が失われる。
いずれ、都市部においても生じる問題

ちなみに…

農村の人口が減ると、何に困るのか

農村住民　※いずれ都市部でも

- 生活インフラ（商店等）が成り立たない
- 人が少なく寂しい
- 地域共同活動ができない

コロナで加速

都市住民

- 災害に対して脆弱になる

洪水防止機能　34,988億円/年（全国）

※H13　日本学術会議　答申より。治水ダムの代替法で評価

人口減　＝　集落機能の衰退？

地域共同活動
（地域コミュニティによる活動）は
徐々に縮小してきた

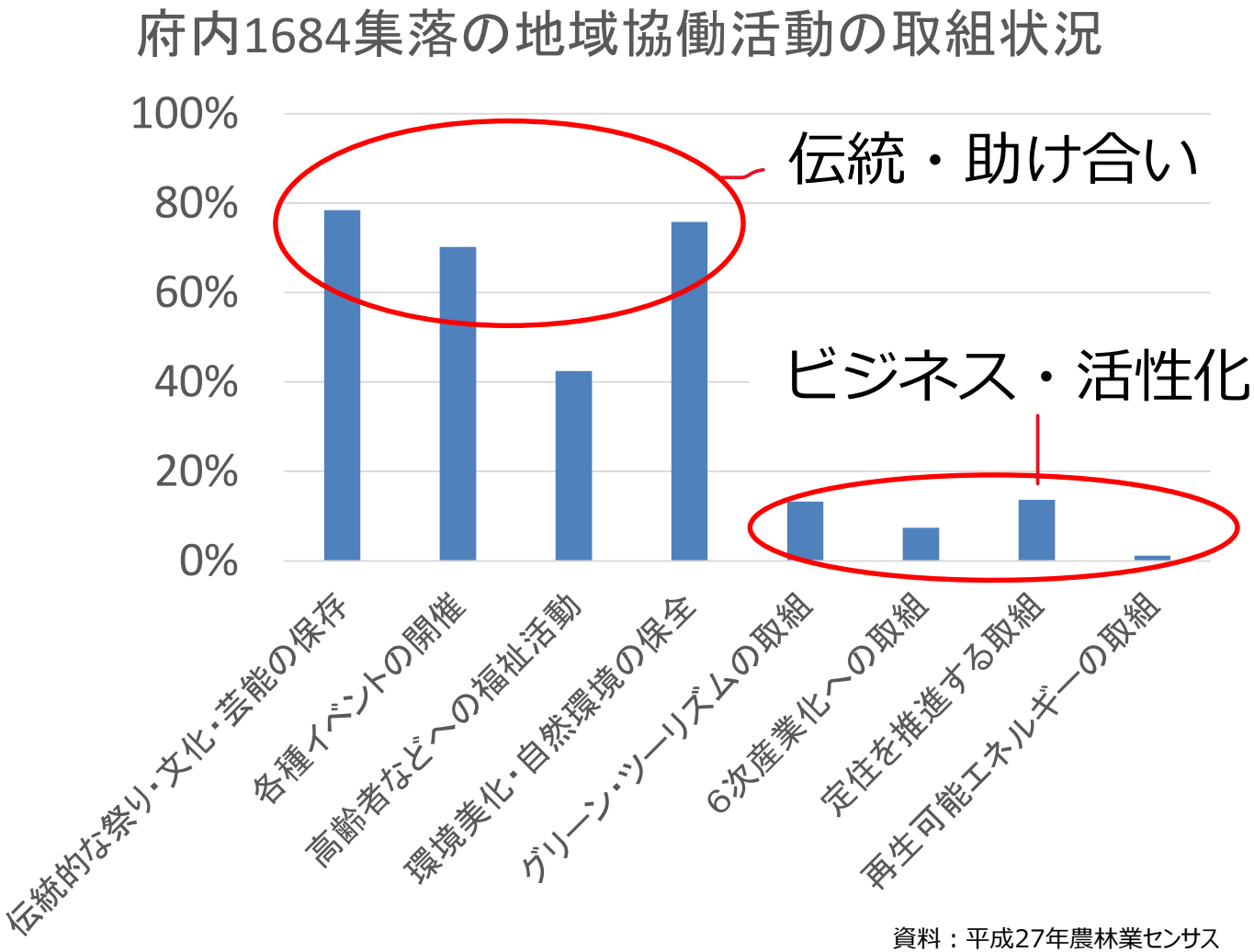
お祭りが無くなる
運動会が無くなる
消防団員が少なくなる　など

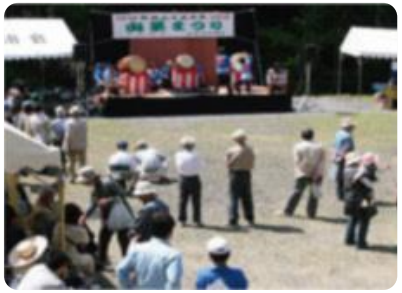
鳥獣害防護柵の設置

大原大祭の開催

そこで、過去何十年もの間、
「地域活性化」「地域コミュニティづくり」
をハード・ソフトの両面で支援してきた。

しかし「がんばれる」集落は決して多くない

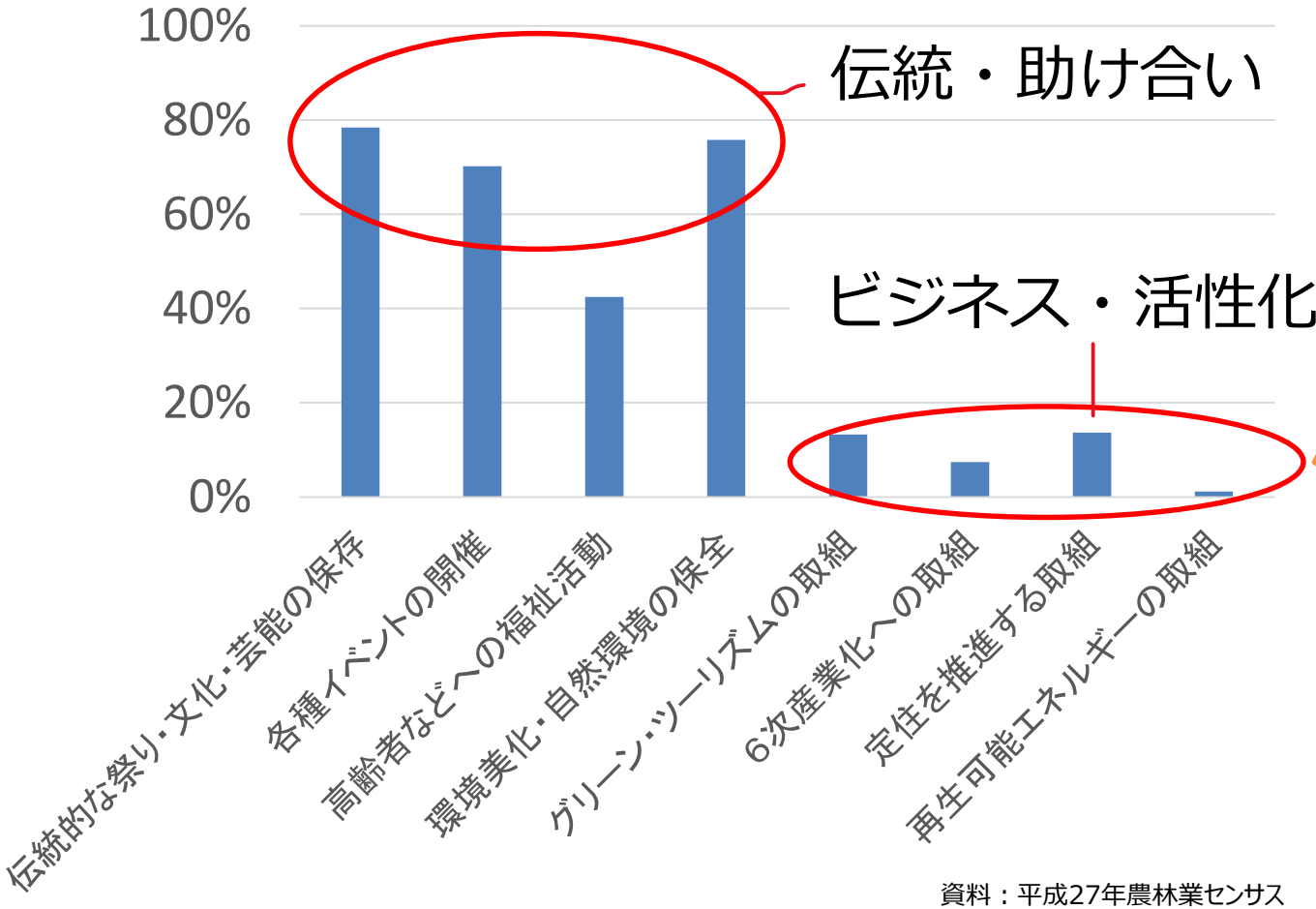




資料：平成27年農林業センサス

しかし「がんばれる」集落は決して多くない

府内1684集落の地域協働活動の取組状況



なぜ少ない？

大多数の「活性化が難しい」集落はどうなる？

資料：平成27年農林業センサス

① 「暮らしやすい地域」とは？

② 「地域コミュニティの力」の決定要因は？

③ 人口減少社会・WITHコロナ時代の
新しい地域コミュニティの形とは？

④ 求められる対策とは？

人は「稼げる」「便利な」場所に住む

	人口規模					経済規模				コミュニティ				利便性	
南丹以北	shuraku	setai	under6	over65	jinkou	nouti	fukakati	jigyousyo	jyugyoin	syuraku_area	yoriai	syurakukinou	socialcapital	DID	ribensei
shuraku	1.00														
setai	−0.05	1.00													
under6	−0.06	0.93	1.00												
over65	−0.02	0.97	0.86	1.00											
jinkou	−0.05	0.99	0.95	0.96	1.00										
nouti	0.01	0.14	0.12	0.20	0.17	1.00									
fukakati	−0.05	0.61	0.57	0.58	0.60	0.09	1.00								
jigyousyo	0.01	0.81	0.69	0.85	0.79	0.16	0.72	1.00							
jyugyoin	−0.04	0.79	0.72	0.77	0.77	0.13	0.89	0.89	1.00						
syuraku_area	0.03	0.10	0.09	0.08	0.09	−0.25	0.13	0.15	0.14						
yoriai	0.00	0.00	0.01	0.01	0.01	0.32	−0.03	−0.01	−0.01						
syurakukinou	0.00	−0.13	−0.13	−0.10	−0.12	0.25	−0.14	−0.16	−0.15						
socialcapital	−0.03	−0.12	−0.09	−0.10	−0.10	0.26	−0.15	−0.17	−0.15	−0.83	0.43	0.71	1.00		
DID	0.16	−0.34	−0.33	−0.32	−0.35	−0.16	−0.23	−0.27	−0.29	0.02	−0.04	0.04	−0.02	1.00	
ribensei	0.03	−0.25	−0.23	−0.26	−0.26	−0.20	−0.17	−0.24	−0.28	0.05	−0.05	0.01	−0.08	0.56	1.00

人口と経済規模には強い相関

人口と利便性、経済規模と利便性には弱い相関

※ H27国勢調査、農林業センサス2015、経済センサス2015のデータを再構成

過去５年間の転入者数　予測値と実績値の比較

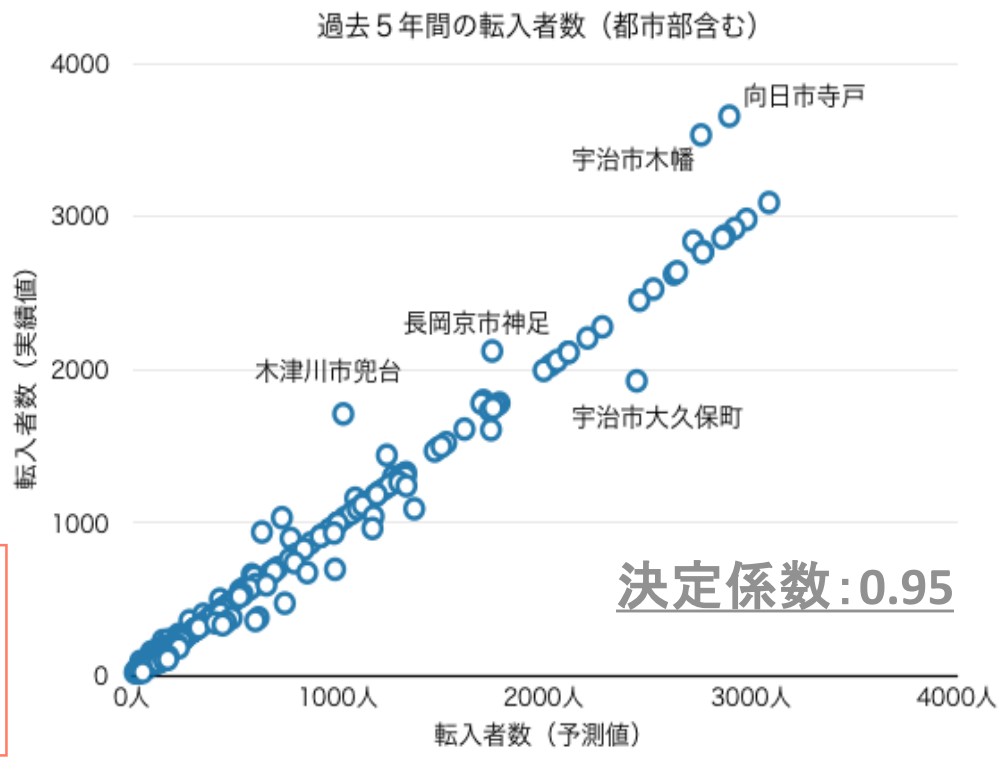
「転入人口」の要因分析

※H27国勢調査　小地域集計結果を、Azure　Machine Learningを用いて分析。
分析モデルはBoosted Decision Tree Regression

主な説明変数（上位5変数）

① 0-　4歳人口
②30-34歳人口
③25-29歳人口
④85-　　歳人口
⑤平均世帯人数

子供と子育て世代人口が
多い地区ほど、転入が多い



「人口」「所得」「利便性」があれば、
「助け合い」「つながり」を得る確率は高い

農村の暮らしは、コミュニティが支えている

		人口規模				経済規模				コミュニティ				利便性	
南丹以北	shuraku	setai	under6	over65	jinkou	nouti	fukakati	jigyousyo	jyugyoin	syuraku_area	yoriai	syurakukinou	socialcapital	DID	ribensei
shuraku	1.00														
setai	−0.05	1.00													
under6	−0.06	0.93	1.00												
over65	−0.02														
jinkou	−0.05														
nouti	0.01														
fukakati	−0.05														
jigyousyo	0.01	0.81	0.69	0.85	0.79	0.16	0.72	1.00							
jyugyoin	−0.04	0.79	0.72	0.77	0.77	0.13	0.89	0.89	1.00						
syuraku_area	0.03	0.10	0.09	0.08	0.09	−0.25	0.13	0.15	0.14	1.00					
yoriai	0.00	0.00	0.01	0.01	0.01	0.32	−0.03	−0.01	−0.01	−0.38	1.00				
syurakukinou	0.00	−0.13	−0.13	−0.10	−0.12	0.25	−0.14	−0.16	−0.15	−0.78	0.43	1.00			
socialcapital	−0.03	−0.12	−0.09	−0.10	−0.10	0.26	−0.15	−0.17	−0.15	−0.83	0.43	0.71	1.00		
DID						−0.16	−0.23	−0.27	−0.29	0.02	−0.04	0.04	−0.02	1.00	
ribensei						−0.20	−0.17	−0.24	−0.23	0.05	−0.05	0.01	−0.08	0.56	1.00

人口や経済規模と
コミュニティは、無相関

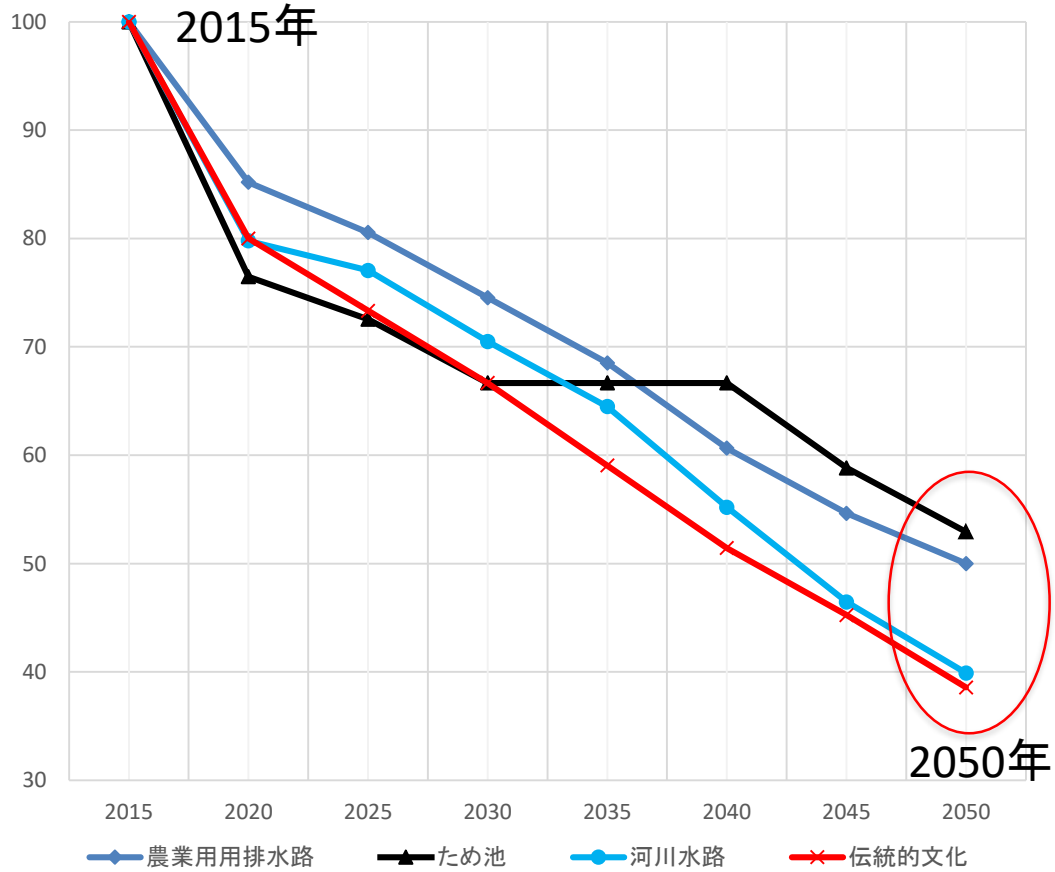
（地理的な）利便性と
コミュニティは、無相関

農地面積とコミュニティは、弱い相関

※ H27国勢調査、農林業センサス2015、経済センサス2015のデータを再構成

人口の減少とともに
集落機能は、「いずれ失われる」

共同活動実施集落数の変化予測（過疎化高齢化集落）



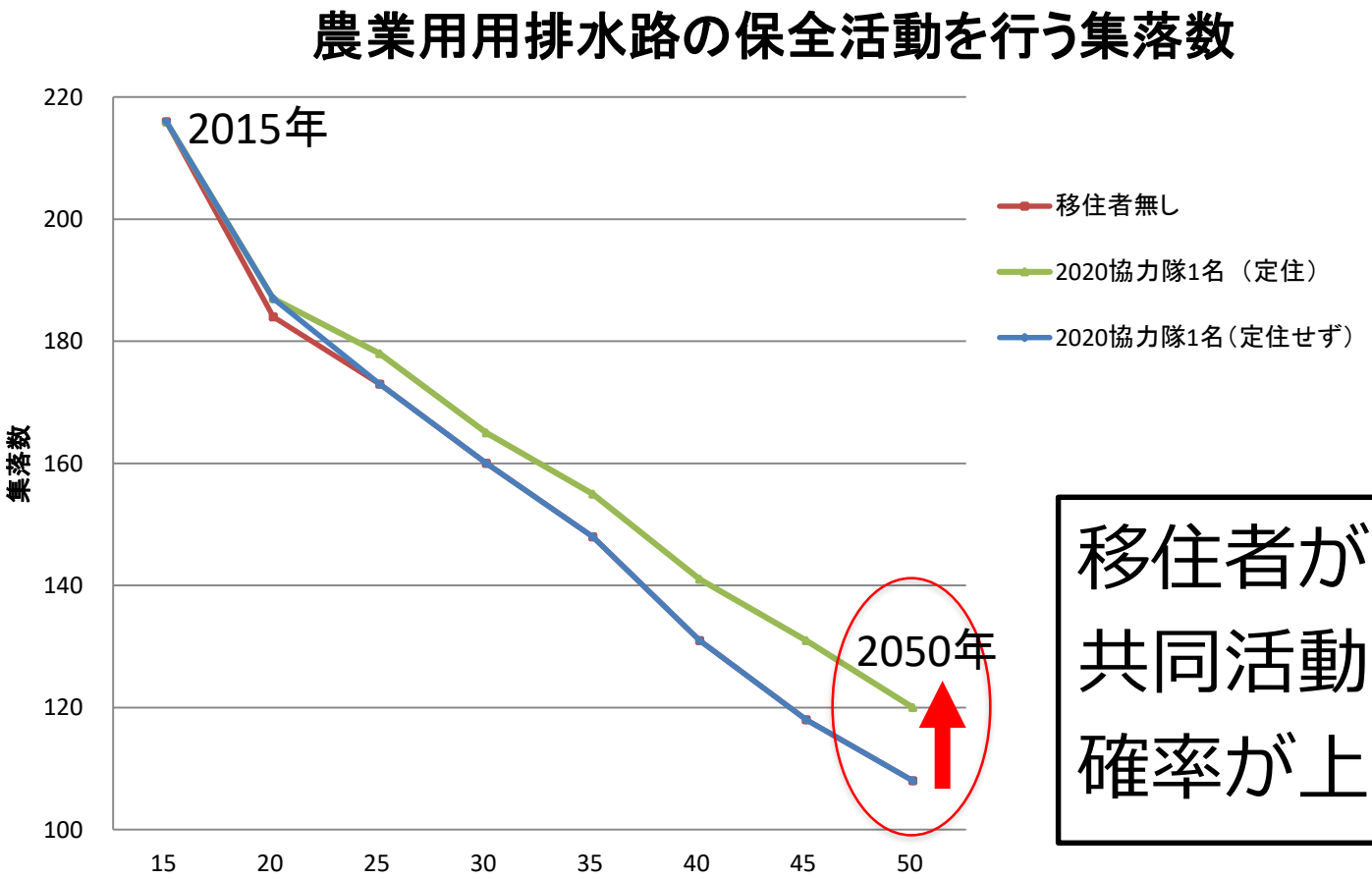
2050年までに
約半数の集落が
活動できなくなる

（排水路・ため池 50%
河川水路・伝統文化 60%）

シミュレーション実施集落数
排水路216集落　ため池51集落
河川水路 183集落　伝統的な文化210集落

※　京都大学大学院農学研究科農村計画学研究室　「過疎化高齢化集落における、集落機能の維持に必要な人的資源のシミュレーション」

移住者は一定の効果あり
しかし、あくまで時間稼ぎ



移住者が入ると
共同活動が継続する
確率が上昇

※ 京都大学大学院農学研究科農村計画学研究室 「過疎化高齢化集落における、集落機能の維持に必要な人的資源のシミュレーション」

「地域コミュニティの力」の因数分解

コミュニティの力（仕事量）

１人あたり
妥当負担量 × 人口(d)

＝ 帰属意識 (a)
× 可処分時間 (b)
× 処理能力 (c)

＞

地域サービスに要する仕事量

$\sum_{n=1}^{n}$ 工数（人・日）n：分野数（営農、祭り・・）

＝ 作業量 (e)
× 作業効率 (f)
× サービスの数 (g)

右辺（地域サービス）を大きくすれば「暮らしやすくなる」が
左辺（共同活動に投入する労力）も増加 ＝ 「しんどい」

コミュニティの力（仕事量）

１人あたり
妥当負担量 × 人口(d)

＝ 帰属意識 (a)
× 可処分時間 (b)
× 処理能力 (c)

子育て・移住定住支援

活動補助金

個人の事情や能力に依存

左辺を、さらに政策的に動かすことは困難

地域サービスに要する仕事量

$$\sum_{n=1}^{n} \underline{工数（人・日）}$$

n：分野数
（営農、祭り・・）

＝　作業量　(e)
×　作業効率　(f)
×　サービスの数　(g)

内容により固定

改善の余地

右辺は、政策的にはほぼ手つかず。

①効率化＋②整理・統廃合　により所用工数を低減

人口減少時代の
新しい地域づくりとは

「人口と活動量を増やす社会」
から
「ムラ仕事を減らす社会」
への転換

人口減に柔軟に対応できる
「ムラの減築」

という仕組みを社会実装したい。

府内小規模集落における
地域コミュニティの実態調査

①A集落（２世帯）

祭、森林、墓は整理済
田は広域組織で管理　等
共同活動の負担を低減

② B集落（12世帯）

住民の半数が移住者
伝統技術が徐々に
失われつつある

（事例）島根県N地区　地域自主組織
「無理をしない地域づくり」

- できることしかできない
- なんとなく続いてきた
  活動は止めた（運動会等）
- 市から事業受託して
  住民サービスを自ら運営
  （水道検針、乗合バス、
  地籍調査の住民調整..）

「ムラの減築」のプロセス

① 「集落が縮小する」という未来の受容

② 「共助」の効率化と統廃合

③ 暮らしへのダメージ軽減のための
縮小スピードの緩和

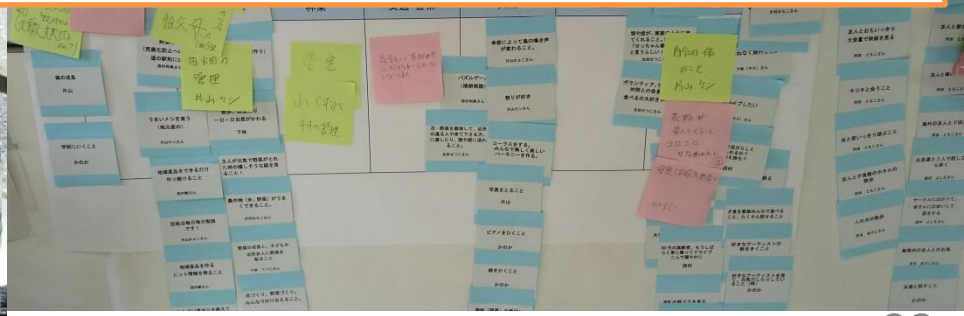
住民ワークショップ

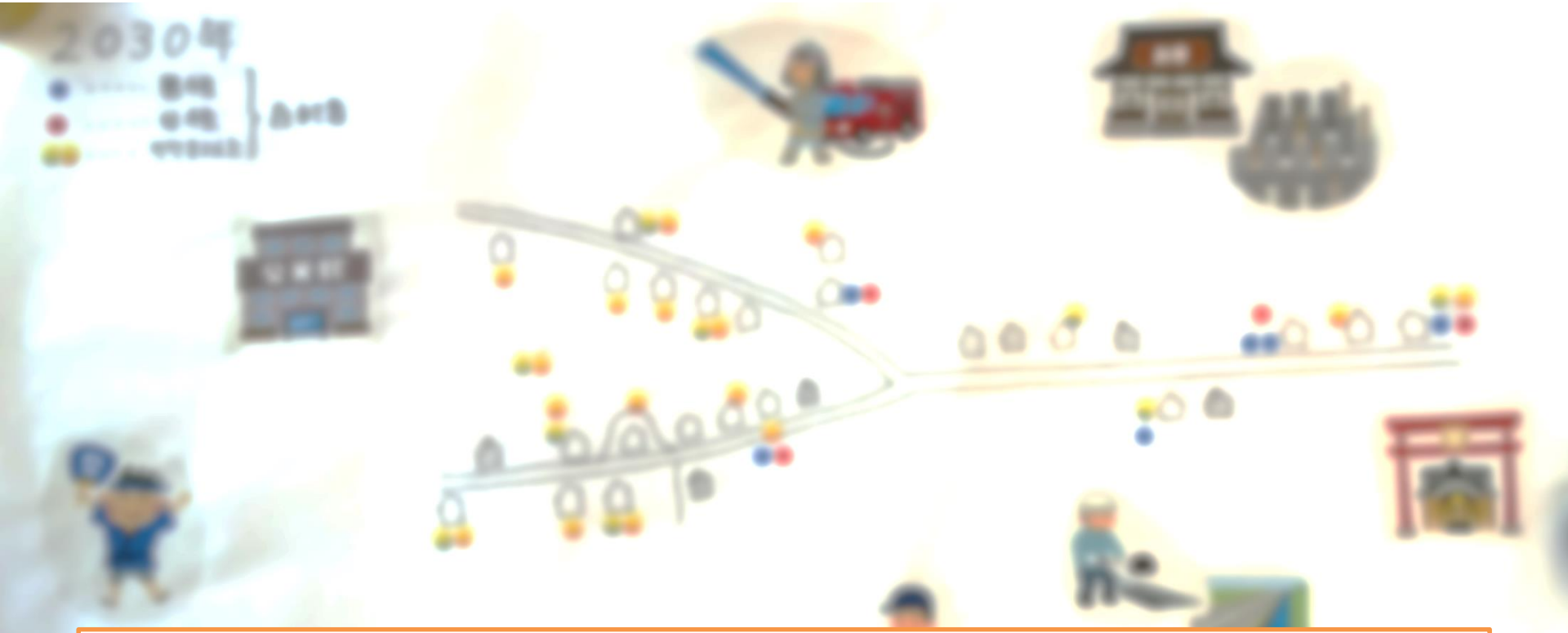
「これからの暮らしやすい」を考えよう

① R2.1.26

② 2．1

③ 3.28（延期）→4.29（延期）→8．1（中止）





将来人口の「見える化」

2030年には、
現役世代はほとんどいなくなる

「楽しいこと」「しんどいこと」「心配なこと」 ふりわけシート

自治会	環境	税務・統計	福祉・援護	人権	消防・防災	体育
・自治会活動が続けられるのか（複数集落の合区が必要） ・区の維持 ・公民館の維持管理　神社なども ・村用や役の量を見直したい ・区の会計等事務をする人が少なくなってきた ・限界集落なので将来が不安 ・人口減少により、区の役をする人がいない ・役が多い ・地域のサロン活動　皆さんがとっても楽しみにして下さり、「楽しいことが1つ済んだ！」と言ってもらえること ・サロンに行ってみんなで話合いをすること ・村おこしの一員として作業や話ができること ・野菜の成長と、子どもや近所友人に野菜を配ること	・空き家 ・うちの空き家のこと ・笹・クズ・スズキが家に押し寄せてくること ・郵便局の存続 ・大簾が守れない（土地他） ・地域内の空き家対策どうする ・父方の祖父母の今後 ・空き家だらけ ・うちのまわりに空き家が多く不用心 ・班内の高齢化により役がいっぱい回ってくる ・自治会の役職が多いこと ・役（村） ・ゴミ収集の大変 ・粗大・金属系のゴミ処理が周辺市町に比べ高い ・夜空、星空をながめること ・地形、景観が好き ・四季の移り変わりが喜び ・季節によって鳥の鳴き声が変わること		・健康でいるかどうか ・急病や事故が起きたとき（若い人は勤めに出ているし）自分で連絡出来ないときどうすればよいか ・自分の健康 ・重いものを持つとき家族がいないので負担 ・独居者として何もかもしなくてはならいこと ・死ぬまで気楽で居る		・救急車くるのに時間がかかる ・消防団員が少なくなった ・消防団員減少	・西部グランドでのグランドゴルフ ・ウォーキングして新しい発見をすること ・友達とウォーキング ・ウォーキング（健康第一） ・人の犬の散歩 ・体操をすること　若返り、今より年をとらないように現状維持を ・お友達と3人で話しながら歩く

教育	農業	林業	交通・警察	文化	寺社	個人的なこと
・学校にいくこと	・田畑の維持管理（水路等） ・猿が荒らしに来ること ・草刈り　お金を払ってもやってもらえないようになる ・墓・神社・林道の草刈りや掃除が出来なくなる	・災害 ・農地・山林等を誰が管理するのか ・山崩れ	・山の中の道路が荒れて車が入らないこと ・運転できなくなったら・・・誰に頼るのか	・地域の方と調理実習をすること ・好きなアーティストを見て、元気をだしたりしていること（時）	・神社の祭り　長老が亡くなりしきたりが分からず守っていけるか ・人口が減少し、みこしが運べないようになる	・自分の体のこと ・安定した収入がない
	を見るとき ・野菜作り（荒廃化防止への対策）道の駅に出品					・ドライブしたい

日常生活の「楽しみ」「しんどい」「不安」の見える化

今後さらに「しんどい」が増える

「しんどい」と「心配」の主な中身

区の役員や事務作業
ゴミ収集
草刈り
田畑の管理・獣害対策
公民館や神社などの維持

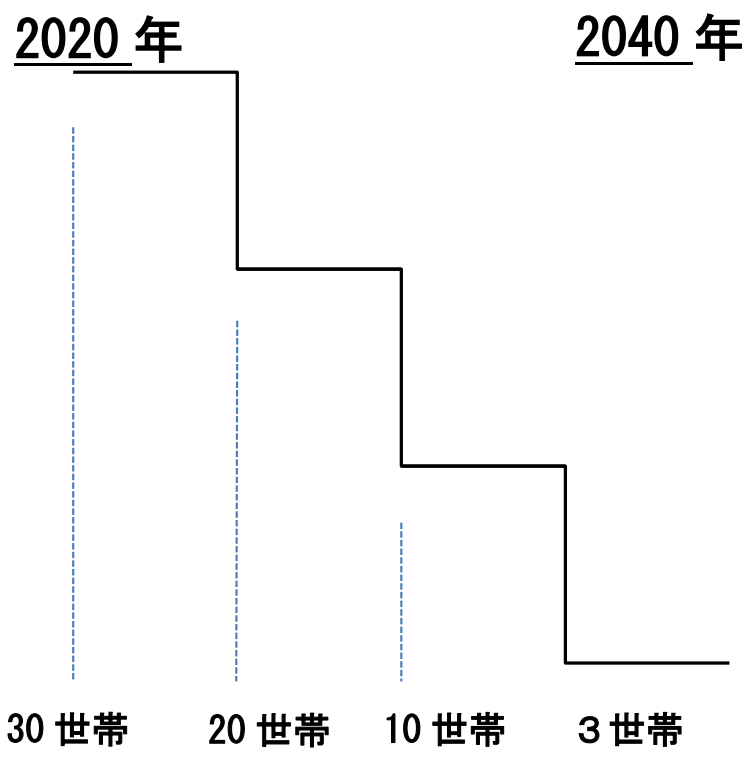
住民によるまちづくり
（共助）の問題
→①効率化
②整理・統廃合

山崩れなどの災害
交通手段
空き家の防犯・防災
自分の健康

行政（公助）または
個人（自助）の問題
「近所の人に
迷惑を掛けたくない」

「ムラの減築」のロードマップづくり

	役	分野	広　野	大　簾
1	区長	自治会		
2	副区長兼会計			
3	班長		1班	1班
4			2班	2班
5			3班	3班
6			4班	–
7			5班	–
8			6班	–
9	監事			
10	監事			
11	最寄長		本郷	–
12	最寄長		立木	–
13	区会議員			
14	環境推進委員	環境		
15	税務協力委員	税務		
16	統計調査委員	統計		
17	民生児童委員	福祉・援護		
18	長老苑後援会委員			
19	遺族会支部長			
20	人権学習推進委員	人権		
21	消防部長	消防・防災		
22	消防班長			
23	体育委員	体育		
24	体育委員			
25	小学校育友会	教育		
26	中学校育友会			
27	農家組合長	農業	合同	
28	副組合長兼会計		合同	
29	水利組合長			
30	副組合長兼会計			
31	土地改良区総代			
32	有害鳥獣委員	林業		
33	林業推進委員			
34	生産森林部		1	
35	生産森林部		2	
36	生産森林部		3	
37	和知の駅を守る会理事	交通・警察		
38	交通安全協会理事			
39	交通安全評議委員			
40	民芸保存会評議員	文化		
41	民芸保存会委員			
42	文化財を守る会			
43	寺檀家総代表	寺社		



？？？

家、山、農地
祭り、神社・・

何を維持する？

集落の縮小を緩やかに

他出者に向けて

<u>実家が空き家になる前に</u>

・自ら住むのか
・近居して管理するか
・移住者に譲るのか

を考え、決めてもらう。

求められる対策

1. 「ムラの減築」という理念の提唱

2. 住民合意形成ノウハウの蓄積

3. 省人化、リモート技術の普及

1 「ムラの減築」という理念の提唱

「人口減少＝悪いこと」ではなく、
「人口減少＝当たり前」

「活性化を目指さない」地域づくり
という新しい考え方の発信

京都府が先頭に立ち、
理念に賛同する市町村を支援

2　住民合意形成ノウハウの蓄積

まずは、共同活動を効率化。
先に余力を作ってから、
様々な共助活動の継続を目指す。

というプロセスデザインができる
人材の育成

府が技術を学び、市町村に伝える。

3　省人化、リモート技術の普及

WITHコロナ、POSTコロナ時代における最優先事項

例えば、地域外からも参加できる「オンライン町内会」の運用

リモートが当たり前の社会になれば、場所に縛られない暮らしが実現

（Ｒ３事業案）「むらの減築」支援事業費

①　地域コミュニティ再構築モデルの形成（委託）

府・市町村・NPO等が連携して「活性化を目指さない地域づくり」のモデル形成、合意形成ノウハウの蓄積

②　地域コミュニティ合理化支援（補助）

地域自治活動の合理化に要する経費を支援（通信環境整備等）

今、著名人やブロガーが「地域を閉じる」論を言い出した

ちきりん
@InsideCHIKIRIN

地方活性化とか地方再生って言うけど、そもそもこんな急激に人の減ってく国で、すべての地方が活性化するわけないじゃん。
っていう前提にたって、いかに今そこに住んでいる人の暮らしを守り=幸せな人生を最後まで送れるようにしつつ、一方で地域自体は静かに閉じていくって言う発想はないのかな？

午後9:00 · 2020年7月29日 · Twitter for iPad

289 リツイートと引用リツイート　**1,605** いいねの数

ちきりん @InsideCHIKIRIN · 7月29日
返信先: @InsideCHIKIRINさん
いま地方に住んでる人の暮らしとか、そこに住み続けたいという人の暮らしを支援するのはわかるんだけど、地方そのものを永久に残す必要はないんじゃないかと思うのだけど

7　48　320

ちきりん @InsideCHIKIRIN · 7月29日
左側は廃線になった線路に少しずつ草が増えてきたところ。
廃線になった線路に草が生えるのはわかるんだけど、右は歩道なんだよ。
歩道なのに、人がほとんど通らないがためにこっちもどんどん草が生えて

これからの時代、維持できない町がある。
リモートで生き残る町もあれば、
畳むところは畳む、ということが必要。
無理なところにお金を掛けてインフラを残す、というのは魅力ある地方にならないと思う。8/1（土）Abema **NewsBAR橋下**

「地域のため」と「住民のため」は似て非なるもの

地域を守る

農地、森林の保全
産業振興
生活インフラの維持
人口維持　etc…

手段

≠

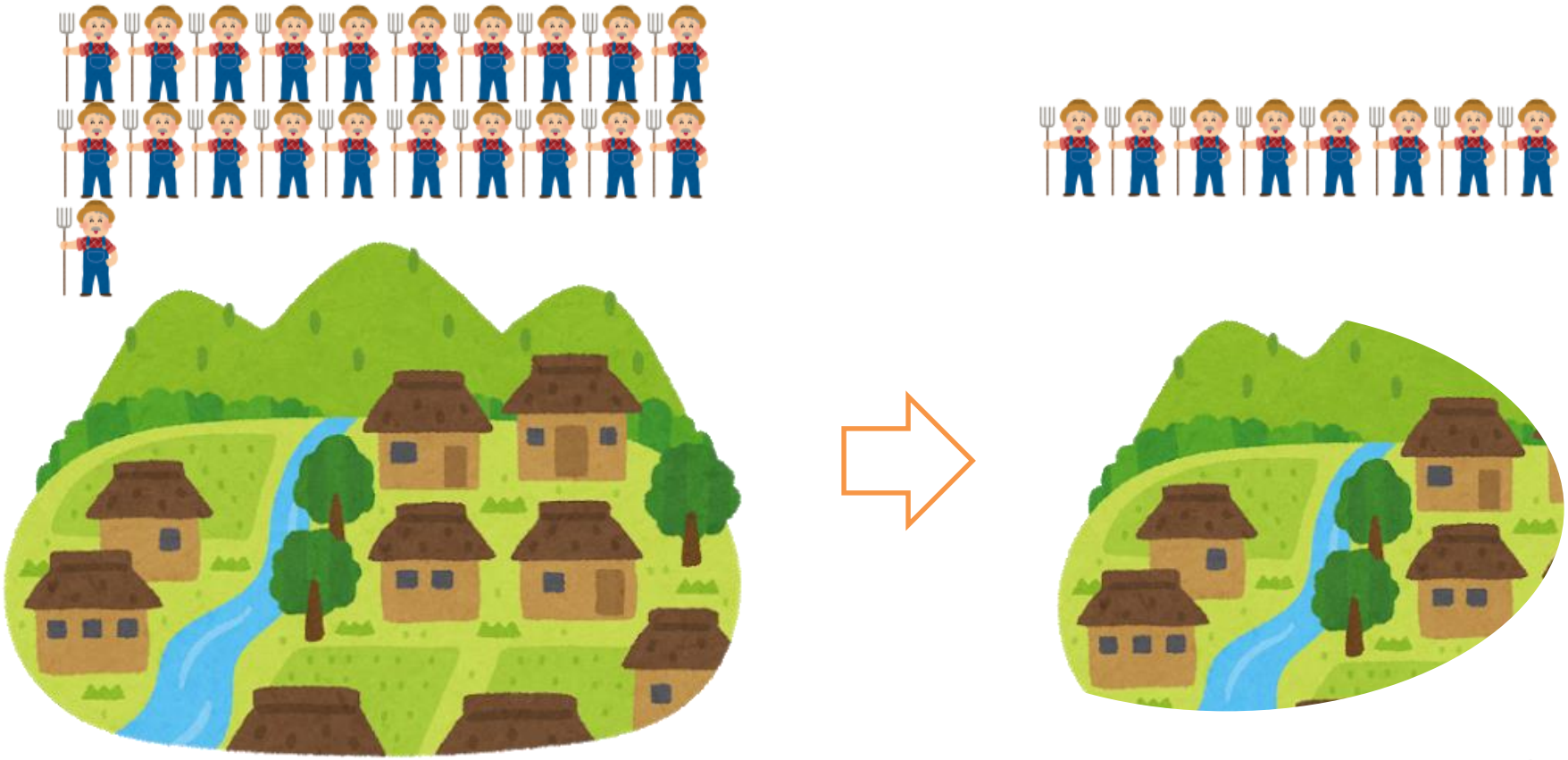
状況

住民の暮らしを守る

時間的なゆとり
経済的な余裕
生活の充実感
家族繁栄　etc…

人口減少時代には必ずしも連動しない

「地域コミュニティ」は、**「住民の暮らしやすさ」のため**に存在するはずでは？

住民のコミュニティと暮らしを守るために

まずは「人の数」に見合った「地域の大きさ」にしよう